研究はやっと始まったばかり

これに機に「初心に帰って」もうひとりかんぱり

丸山 尚子

はじめに

この度は、「手が育つ・子どもが育つ・生活をつくる」京都法政出版、一九九三年が思いがけず栄誉ある賞を受賞致しました、ふと初心の頃を思い出しました。

私が「手の労働」を研究テーマと決め、手について研究を始めたのは大学院修士課程一年の時でした。エンゲルスの「人と間人になるに際しての労働の役割」を読み感動したのがきっかけでした。

当時私は「今でもそうですが、何事においても、はじめに何があるのか、ということにとても興味がありました。それから、だんだんにわいていきました。これから自分が長いことつつきあうことになるであろう人間は、どこから、どうしてやってきたのか、何か人間のはじまりだったのか、何によって発展・発達するのかを知りたがっていました。

そんな時出会ったのが、エンゲルスの論文でした。
「手の労働」が人間関係の文献にしばしば登場する。「手の労働」は、下肢の障害をもつ子どもたちや大人の人々を対象にして、足について考えたことも、何らかのいじくろい条件としていたかもしれません。

もちろん、こうして始めた「手の労働」の研究では、その頃は、「手の労働」などということがままだ珍しい時代でした。さまざまな考えを想い出そうという?

「手の操作」、「手の動作」、「手の作業」といった。どうせ、それらと関かれ往来したものでした。

第一段階の目、手の操作、手の動作、手の作業の関係で考えると、それは「もう一つ」、「手の操作」、「手の動作」、「手の作業」ということばを用いたり、特に「手の作業」、「手の動作」について考える必要がある。ただ、それは、手の労働、足の労働、もしあるいはいうわけ、「もはや」という。
たくのの方に支えられて
はじめの数年（在仙台時代）は「手を使っている
活動と認識の発達の関係」について、幼児を対象
に、実験の中で捉えることを主にしておりました。
やりで、一九六七年、徳島大学教育学部幼稚園教
員養成課程に教員として就職、「保育」という日常
場面での「手」や「手の労働」に関心を持たざるを得
なくなりました。やっと徳島に慣れ、なじみが深
きはじめた頃、保育所通いをはじめました。日常的
な生活の場面での子どもの観察を通じて、「手」の
発達の過程を捉え直したいと思ったからでした。
さくらが、しばらくして、（一九七〇年代の初
め）、「存知のように、子どもの手の異変」
不器用になった。手が虫歯になったと相談され
たが多くの人たちによって指摘されました。やが
て、足の問題や身体のおりそ。それらと併せて指
摘された心の問題もありました。
「手」の発達課題が切実な問題意識となったのはその頃から
生活を支え、生活をつくりだす「手」という視点
から「手」を見直したい。そうした「手」こそ、手
どもたちに育てなければならない。「手」なのだな
いか。その「手」は、やがて、子どもたちのこころ
を育て、生き方を支え、生き方をつくりだすのだと
考えたのです。
ちょうど発足したばかりの「子どもの遊びと手の
労働研究会」に入会（一九七三年頃）間もなくし
て保母さんたちとの「研究会」にようし手の労働
研究会の一九七八年秋発足もでき、保母さんた
ちによる「保育」との共同研究体制ができあがりま
した。
やっと、格別の「手」、「手の労働」の研究は
じまりでした。
月一回の研究例会は楽しく、多芸多才な保母さんたちに圧倒されるのが日々の中、いくつかの成果
なります。本会において多々の研究をすすめることができ、充実した中で
（注①・②・③）も出すことができた。思えば本当に多くの方々にご指導とお世話を感謝
いただけました。とくに恩師の松本金寿先生、宮川知彰
先生、共同研究者の近藤隆子さん、そして保育の場
から多くのヒントを提供して下さった、とくしま手の労働研
究会（現在「もみじの会」）のみんな、本当にありがとう
がとうございました。これを機会に、感謝申し上げ
ます。子どもたちの協力がなければ私の研究は成
り立ちませんでしたから。

子どもたちに感謝
またこの機会に実験や観察、保育に際し、協力し
てくれた多くの子どもたちにも感謝しておきたい
なら、子どもたちの協力が必要では、私の研究は成
り立ちませんでしたから。

私の「手」の発達の研究に、少なかつヒントを
提供してくれたのは、わが家の三人の娘たちです。
実験の開始前はもちろん、真っ最中にも、家に帰
ると、「実験の材料はこれでいいか」、「どんな道具
がいいのか」、「観察のポイント？」等々まだ小さなことかっ
た娘たちを相手に、ああでもないこうでもないと試
してみたものです。

ビデオもたくさん撮りました。記録もいやという
程ありました。

いい道具（はさみやナイフ等）やおもちゃや玩具
を探して、あちこちの文房具屋さんや金物屋さん、
おもしろいおもちゃ屋さんをたずね歩き、おもしろい
ような玩具を訪れては子どもたちと夢中になって「夢中になった
帰っては子どもたちと夢中になって「夢中になった
戦争 gammagenファイターフライトシミュレータ」という
ゲームを楽しむ。子どもたちが夢中になっているのを
見ていると、自分も夢中になってしまいます。
子どもたちからの宿題

娘たちの質問に答えられなくて
そんな母親の姿を見ても、不思議に思ったのでしょ
うか、ある日、長女が「確か一日、六歳の頃だったけど
思いました、おかもぎさん。おかあさんの○○ことばはだいがくの
せんせいでしょう？どなたおべんきょうをおしえ
ているの？」と聞いてきました。

「ふうん」といったながら自分の手を見ていました。

「おおてのせんせい」どうしたのか、どうしたのか、かしこいおてになって
のかなあとかね」というと、長女は

「そんなことかんたんかんたん。こんなんをたくさん
たべればいい、それからおてのたいそうをする」
といいました。

それもいいね、だけどもっとたいせつなのはね、
しっかりおてをつかってあること。
それからお

やがて小学生になり、わが家においてある手の絵
本や子ども向けの手の本、手の進化の漫画等を片っ
端から読みだした長女が小学校三年生になって間も

ない頃、手のことばはわかるけど、さらさらさんがで
ていくところがさっぱりわかならない」と聞いて聞き
にきました。

私は待っていましたとばかりに、手の大切さや仕組
み、そして手の由来について得意になって話し
た。いつか自分の子ともたちに、手の話をするのが
夢だったその頃の私。

思い出、思いきり熱弁をするかと思ったのが
もはやるの。
私の話に上の二人は興味をもち、いろんな質問をしてきました。
「指は五本と誰が決めたの？」
「お兄さんの指よりお母さんの指が短いのはなんで？」
「この間行った動物園のおさるさんも、もうそこら。
黒いかingletonした二本足で歩けるようになるの？」などなど。

ところが、突っ込みをするといろりん次女（当時小一）
がいきなり、「
お母さんの子どもの頃にしっかりまだ残ってる
人やまだしっかり立てないような人とかがたくさん
いったん？」と聞いてきました。「大昔の意味が
まだ飲み込めなかったようです。大昔の意味が
はっきり説明しても「わからない」。
これにはすっかりまいてしまいました。

彼女たちは納得のいく説明がつかないままに、そ
の時も終わってしまいました。

そんなことから、いつの日にもか、彼女たちは含め
て子どもたち（小・中学生）に納得のいくように手
について説る本を書かねばと思思うようになりまし
た。手のいろんなことの説明ができるよう、さらに
には、手が人間をつくり、手が人間らしい生活の基
となるのだということ、その「手」を育てるのは、
ごく普通の楽しい毎日の生活であること、その中
で、「手」だけではなく、ここに何見せ、子どもと
丈夫に、全身を育てることが大切であること、こ
うして育った手が、人間らしい生活をおくり、自立
的に生きるものとなるのだということを伝えたいと
思ったのです。

手を育てる。主体である子ども自身
に精一杯伝えたい、そう思ったのです。
これは子どもたちから課せられた宿題のように思い
ました。
子どものための「手の本」が書ける日まで

しかし、幾度か思い立ちながら、未だに果たせ
いありません。子どもたちと真っ向から対するにはま
ただ未熟、見せかけそう、もっと深めれば……と
思わずにも日がたってしまいました。

一つのことに打ち込んだといえば聞こえはいいの
ですが、要するにこれしかできなかったのです。し
かほんの入り口のところにたどりついただけ。実
際のところ、研究はいまやと始まったばかりなの
です。

もう一息、がんばろうね。文字通り「初心に帰っ
て励まなければならない。そしていつの日か子ども
たちからの宿題をはたすことができたらと思いま
す。それは、はたして、いつのことになるのでしょ
うか。